

雑 草 通 信

船津好明 1936 年生まれ

思いつくままに綴り、書き直しを繰り返し、意を尽くそうと文を練るのは、心身の劣化を遅らせるのに役に立つと考えました。内容は専門外ですから、学問的には書けません。勝手に他人に送りつけるのは、この歳になった私の新たな冒険です。他人様にはどうでもよい内容かも知れません。差し障りがあるかも知れません。浅はかと思われるかも知れません。破棄して下さって構いません。(雑草の「雑」は内容が様々であること、「草」は書き留めたものの意味です。)

片仮名語の氾濫は遺憾

日本語は言文を通じて、即ち言う場合も書く場合も、昔から使われてきた言葉によっていた。それでも言葉は時代と共に変化するもので、新しい言葉が生まれる。ある言葉は広く普及し、長く残るが、ある言葉は一時的に使われるだけで、衰退しやがて死語になる。例えば「自転車」は遠い昔にはなかったが、ある時からその乗り物の姿と名が世間に知られ、新しい日本語になって普及、定着した。

日本語の書き方は、平仮名に漢字を混ぜた形で、過去長い間表されてきた。算用数字は外来文字だが、使用を問題にしない。明治以後、日本は国際化の波を浴びるようになって、外国の言葉が多く知られるようになった。外来語と呼んでいる。日本語の中に外来語を混ぜて書く場合は、外来語は片仮名(漢字語はそのまま)で表すことになっている。片仮名の多くは外来語が占めるが、他にも色々ある。外国語から派生した言葉、変形した言葉も片仮名で書かれる。テレビ、パソコンなど。これらが連結、組み合わせられた言葉も片仮名で表されることが多い。片仮名に並んでローマ字による略語も多く、多用は問題に思う。なお、片仮名は外来語ばかりでなく、造語、即ち作り言葉や書き手が特に意図したときに書く場合がある。書き手が、平仮名や漢字では平凡だと思って、敢えて片仮名で書いて注意を惹く場合もある。新聞の事件記事の中に「ヒモ」とあった。物品の紐から転じて、人と人の特別なつながりを意味していた。

日本は 150 年ほど前、明治時代になり、鎖国から開国、国民の目は海外に向けられることとなった。外国の地名、人名、物の名、病名、学術用語など、片仮名で書く言葉が数多く知られるようになった。以後、外来語の波は途切れることなく続いた。昭和 10 年代は戦争の時代で、特に後半は大戦で、英語は敵国の言葉であり、親しむのは時局にふさわしくないとして、使用を憚る時代であった。当時の日本の最友好国は独逸(ドイツ)であった。戦争は昭和 20(1945)年に終わり、英語は復権し、日本の最友好国は米国になった。外来語は英語が中心となり、増えていった。学校での英語教育は必修となり強化された。英語に限らず外国語で示された文字や音声を理解できることは望ましいこととなった。

外国語は使うべき時、使う必要がある時に使うものである。例えば、海外旅行をして日本語が通じない場合など、その地域の言葉が出来ることは望ましい。それには英語が最も役に立つ、世界での共通性が高いと言う事情から、英語が出来ることが望ましいのである。それが、知らないうちに日本語の中に英語などの単語や語句を織り混ぜる現象を招き、それが高じて現在では日本語の中に英語等が氾濫気味になってきて、日本語の乱れを招いている。真に英語が出来るというのは、使うべき時に使えることであって、使うべき時に使えないのでは出来るとは言えない。使う必要がない時に使うのも感心しない。

私は日本語の中に外来語や片仮名語を入れることには消極的で、出来る限り既存の日本語によることにしている。適切な日本語が見当たらない場合に、やむを得ず入れている。適切な短い日本語が見つからない場合は、外来語はそのまま片仮名で書くことにする。「ニュース」は日本語に直すと長くなるし、一通りで決めにくいので、片仮名で書く。「パン」も仕方がない。無理に漢字を当てることはしない。

よく聞く言葉に「ケース」がある。箱や容器の意味の他、場合、場面などを意味する。適切

な日本語があるのに片仮名語がよく使われる。

だいぶ以前に、外交評論家の講演を聞いたことがある。片仮名語を多用していた。「ノースコアとネゴシエイトし、シーオブジャパンをピースフルにする。」と得々と語っていた。「北朝鮮と交渉し、日本海を平穏にする。」と理解した。講師は片仮名語をふんだんに使いたかったようだ。

現在、著名人、知識人、官公庁、企業等で用いる日本語には、外国の言葉や造語・略語の類が、片仮名や外国の文字の形で、あるいは音声で多く入っている。この人達は競うように多用して顧みない。誇らしげにさえ見える。誰かが初めて使い、大衆向けの紙誌や放送に乗ると、広がりが速い。

日本語で十分意を尽くせるものを、敢えて片仮名語を使うのはなぜか。優越意識か。知性の高さを意識してか。変わった言い方をして痛快・斬新に感じるものか。表現は自由であるから、是非を言うものではない。使い続けると習慣・口癖になってしまう。聞く側も理解できれば真似て使い、知性が高まったような気になる。一般人も聞いて理解できると、自分も抵抗感なく使うようになる。片仮名語はこうして社会的に広がっていく。

「ジェネリック」という言葉がある。これは医事・薬事関係者の専門用語で、何年か前に使われ始めた。私は初めて聞いたとき、けげんに思った。新薬は特許権などの関係から、他社が勝手に真似て製造することはできないが、一定期間経つと、他社も同じ効能の薬を製造できるようになる。そうして出来た薬をジェネリックと言っている。今では「後発医薬品」と呼んでいる。これに対して初めの新薬は「先発医薬品」となる。

私は日本語の中に片仮名語が過剰に見られる現状を遺憾に思っているが、他の人はどうか。

国の文化庁が日本語に対する一般国民の意識を、世論調査によって調べた結果がある。今年（2020）3月に調査したもので、結果が分析、公表されている。文化庁のホームページに出ている。以下に私の注目点を挙げておく。

「国語が乱れている」と思う人は66%と多い。そう思う人のうち「どういう点で乱れているか」と問うと、複数回答で「外来語・外国語の多用」は17%で、あまり多くない。多いのは「敬語の使い方」や「若者言葉」で各6割余を占めている。

国立国語研究所では世間で使用されている外来語について、日本語への言い換えを提案している。同研究所のホームページに個別、具体的に示されている。外来語の多用を控えるよう促しているように思える。

時々新聞等に、片仮名語の使用の過剰を問題視した記事を見ることがある。私の考えと似ていて、喜ばしく思うが、その種の声は少ない。数か月前、新聞の読者投稿欄に、片仮名語の過剰使用を憂慮する記事があったので読んだ。私の思いと同じで感心した。投稿者は問題に思う片仮名語として「ウィズコロナ」を例に挙げていた。

最近では「Go To ○○」と表して、何かの行動を勧めている。日本語と同列に使われている。ここまで来たか、という思いがする。

片仮名語には、外来語ばかりでなく、造語も少なくない。略語、記号などもこれに準じて多い。これらを収録した辞書もあり、分厚い。手近な1冊を見ると、約960頁、片仮名語は約3万2千語、略語（ローマ字）約6千5百語（いずれも推定）収録されている。

言文は表現の手段であり、言い手、書き手には表現の自由があるから、片仮名語を使って悪いとは言わない。ただ現今、片仮名語の使用は、度が過ぎると思う。氾濫と言って良い。何事も程々、中庸がよい。私は現状を遺憾として、拙稿でも片仮名語の使用を敢えて控え、最少限にしている。日本語は日本文化の根底をなすものであり、乱れると文化も崩れてしまう。言葉も文化も乱さず崩さず大切にしたい、と無力ながら現状に抗している。

既刊各号は <http://www.wwq.jp/zassoutuusin.html> 又は <https://9226.teacup.com/fune/bbs> で閲覧可。